

卒業後のキャリア発達に寄与するキャリア教育の検討

Research on Career Education Contributes to Career Development after Graduation

－中学校におけるキャリア教育プログラムの作成－

- Development of Career Education Program in Middle School -

河崎智恵*

川端亜紀子**

Tomoe Kawasaki*

Akiko Kawabata **

奈良教育大学教職大学院*

奈良教育大学大学院教育学研究科教科教育専攻**

School of Professional Development in Education, Nara University of Education*

Major of Education, Nara University of Education**

＜あらまし＞ 本研究では、卒業後のキャリア発達に寄与し得るキャリア教育について検討し、実践的なプログラムを開発することを目的とする。1. 大学卒業後の有職青年のキャリア意識に関する質問紙調査の結果、暫定的決定経験は卒業後のキャリア発達に影響を及ぼすことが示唆された。2. 有職青年のキャリアの諸能力に関する質問紙調査の結果、キャリアに関する4能力領域には相互に相関が認められた。また中学校段階で暫定的決定経験を有する者は、4能力領域の全ての得点が高かった。3. 得られた知見をもとに、中学校におけるキャリア教育プログラムを作成し、授業実践を行った。プログラム実施後のアンケートでは、キャリアの諸能力の得点上がり、多くの生徒が職業や将来に興味や展望を抱くという結果を得た。最終的に、A中学校の現行のキャリア教育プログラムを再検討した上で、改善案を提案した。

＜キーワード＞ キャリア教育 キャリア発達 中学校 プログラム 授業実践

1. 研究目的

我が国の学校教育において、従来の進路指導に代わり、主体的に生き方を探求していくキャリア教育が実施されるようになってきた。1999年に中央教育審議会答申にて、キャリア教育を小学校段階から実施することが提言されて以降、キャリア教育は初等・中等教育における課題として認識されるようになった（文部省 1999）。2002年には国立教育政策研究所生徒指導研究センターにより「4能力領域からなる学習プログラムの枠組み（例）」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2002）も示され、これらのキャリア教育モデル、および枠組み例をもとに多くの教育実践が蓄積されつつある。

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、

職業観を育てるために～」（文部科学省 2004）では、キャリア教育を「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義している。

しかし、学校キャリア教育は未だ緒についたばかりであり、子どものキャリア発達、特に卒業後のキャリア発達まで視野に入れた実践には至っていないのが実情である。

このような教育的課題をふまえ、川端・河崎（2008）は、大学生のライフストーリー分析より、図1のようなキャリア決定プロセスを示し、暫定的決定（意思をもった職業方向性の決定）が、その後のキャリア決定プロセスに重要な意味をもつことを明らかにした。

具体的には、暫定的決定を行っている者は、職

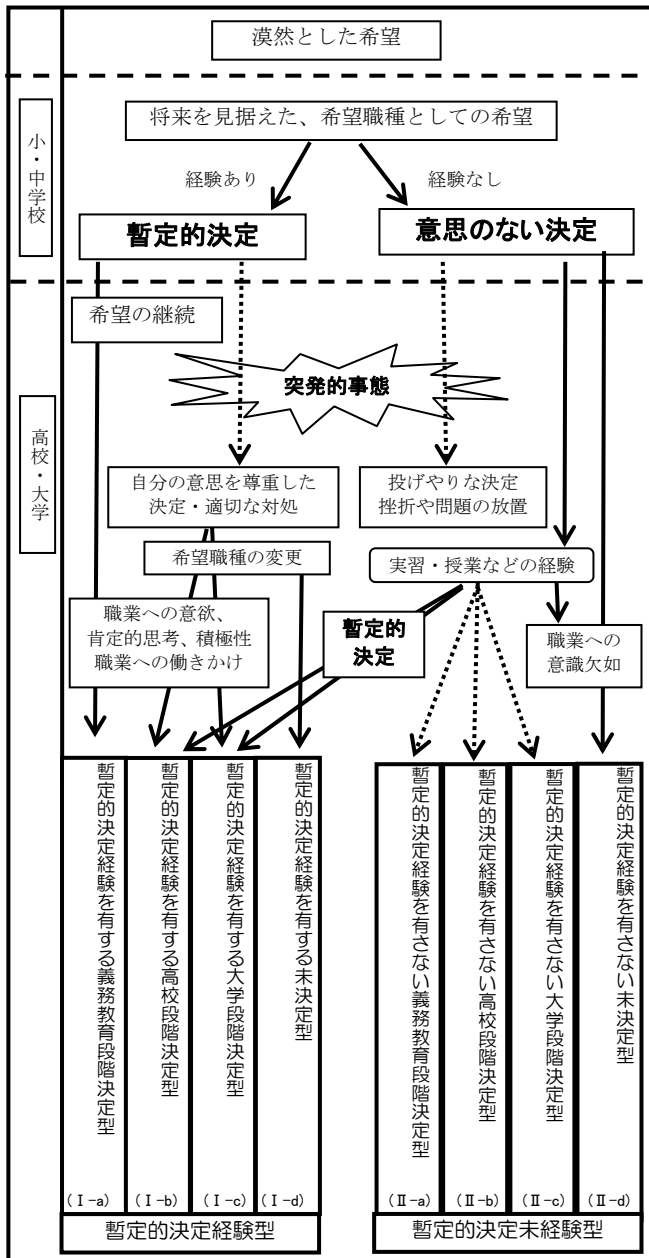


図1 大学生のキャリア決定プロセス

業に対する肯定感や積極性が高く、職業に対する働きかけも積極的であった。また暫定的決定経験は、転機や挫折に怯まず進んでゆく強さや、自己を見つめて、より良くしようとする意識を育んでいた。

一方、暫定的決定経験を有さない者は、暫定的決定を有する者に比べて職業肯定感や積極性に欠け、「働くこと」自体を回避したがる傾向が認められた。さらに、暫定的決定経験を有する者の中でも、特に、義務教育卒業以前に暫定的決定を行った経験を持つ者は、「職業への積極性」「職業への憧れや肯定感」「職業への働きかけ」などが顕著であった。

これらの結果より、義務教育段階において、暫定的決定を促す教育を行うことの重要性が示唆されたが、これらの知見を教育実践に結ぶことは課題として残された。

そこで本研究では、卒業後の職業生活におけるキャリア発達に寄与しうるキャリア教育プログラムを検討することを目的とし、1. 卒業後の有職青年のキャリア意識に関する質問紙調査、2. 有職青年のキャリアの諸能力に関する質問紙調査を実施し、教育実践への示唆を得る。3. 得られた知見をもとに、中学校におけるキャリア教育プログラムを作成し、授業実践の上、最終的に効果的なプログラムの提案をめざす。

2. 研究方法

2.1 大学卒業後のキャリア意識に関する調査

先行研究 (川端・河崎 2008) において、2004年に実施したインタビュー調査の対象者 20 名 (男性 9 名、女性 11 名) に対して、2006 年 6 月に、キャリア意識に関する質問紙調査を実施し、5 名の回答を得た。質問項目は、職業生活への意欲、職業の生涯継続の意思、職業・生活に対する充実感、将来への不安などの項目と、各項目に関する自由記述によって構成される。

2.2 有職青年のキャリアの諸能力に関する調査

2006 年 4 月～8 月に、22 歳から 35 歳までの 84 名 (男性 33 名、女性 51 名) を対象に有職青年のキャリアの諸能力に関する質問紙調査を実施した。質問項目は、暫定的決定経験や職業に対する行動、継続の意思などに関する項目と、キャリアに関する能力領域に関する項目で構成される。

キャリアの能力領域に関する質問項目は、河崎 (2004) および柳井 (2001) を参考に作成した。質問項目は「人間関係能力」「意思決定能力」「キャリア情報探索・活用能力」「キャリア設計能力」についての、各 10 項目、計 40 項目から構成され、分析には SPSS を用いた。

2.3 キャリア教育プログラムの開発・授業実践

調査結果から得た知見をもとに、中学校におけるキャリア教育プログラムを作成し、授業実践を行った。

授業実践は、2008 年 6 月から 7 月に、筆者 (川端) が、大阪府寝屋川市立 A 中学校の 1 年～3 年生の家庭科授業において実施した。各学年とも 3 時間ずつ、合計 9 時間の授業実践を行った。

プログラム実践の前後で、生徒に 4 能力領域に関する質問紙調査、および授業に対するアンケートを実施した。対象者は 1 年生から 3 年生の生徒 356 名 (男子生徒 192 名、女子生徒 164 名) である。

分析結果に基づいて、A 中学校のキャリア教育プログラムを再検討し、効果的なプログラムを提示した。

3. 結果と考察

3.1 大学卒業後のキャリア意識に関する調査結果

表 1 は、大学卒業後の有職青年のキャリア意識について示したものである。

表 1 大学卒業後の有職青年のキャリア意識

事例	大学段階でのキャリア決定プロセスの型	実際に職業に就いてみた感想	生涯継続の意思	充実感	将来への不安
F1 (女性)	暫定的決定を有さない未決定型	予想していたよりよくない	ない	×	○
F2 (女性)	暫定的決定を有さない未決定型	予想していたよりよくない	ない	○	○
M1 (男性)	暫定的決定を有する大学段階決定型	予想通り	ない	○	○
F3 (女性)	暫定的決定を有する大学段階決定型	予想していたよりよくない	ない	○	○
F4 (女性)	暫定的決定を有する高校段階決定型	予想していたよりよい	わからない	○	○

大学時に「暫定的決定を有する大学段階決定型」であった 2 名の対象者と、「暫定的決定経験を有する高校段階決定型」の 1 名は、職業に対する自信や期待、毎日の生活への充実感が見受けられ、いずれの対象者も非常に積極的であった。例えば、暫定的決定を有する大学段階決定型の M1 男性は、高校段階で暫定的決定を行ったものの、大学に進学して、実際に希望職種と向き合うことで、小学校の教師から、高校の教師へと希望を変更した。本調査時、この M1 男性は、大学院に通いながら、非常勤講師として勤めている。自分が今おかれている状況は、希望通りのものではないと認識しながらも、現在の職業に対する充実感を持ち、さらに自分の望む道をしっかり見据えていることが伺えた。この事例のように、暫定的決定経験がある 3 名 (M1・F3・F4) には、共通して自分の人生を受けとめ、自分自身の手でプランニングしようとしている姿勢が認められた。

それに対して、大学時に「暫定的決定を有さない未決定型」であった 2 名の対象者 (F1・F2) は、いずれも、職業に対する不安や後悔を語っていた。また、自分で決定して進んだという認識がないため、「流れのままに流された」場所が、自分の現状や気持ちにそぐわない場所だと悟っていても、なかなかその状況を打開できない様子が示された。例えば、F1 女性は、親が「一人暮らしをし

たいなら、国公立の大学に進学しなさい」と言ったために、なんとなく大学を選択し、入学した。しかし、教師になることに興味が無い自分と周囲との認識の違いに悩み、就職についてもどのように方向付けてよいのか途方に促していた。本調査時、F1 女性は一般企業に就職していたが、既に仕事内容の過酷さ等から、仕事をやめることを考えている。しかし、先の見通しがたたずに、身動きが取れない状況に陥っていた。

これらの結果より、暫定的決定経験が卒業後のキャリア意識にも、強い影響を及ぼす可能性が示唆された。

3.2 有職青年のキャリアの諸能力に関する調査の結果

3.2.1. 有職青年のキャリアの諸能力の得点

キャリア能力領域に関する各質問項目に対し、「そのとおりだ」「どちらかといえばそうだ」「どちらともいえない」「どちらかといえばそうではない」「そうではない」の 5 つからの選択制で回答を求めた。それらを「そのとおりだ」は 5 点、「どちらかといえばそうだ」は 4 点、「どちらともいえない」は 3 点、「どちらかといえばそうではない」は 2 点、「そうではない」は 1 点として点数化し、平均点を算出した。

表 2 は各能力領域の平均値を示している。4 能力領域の中でも、職業について調べ、その情報を活用しようとする「キャリア情報探索・活用能力」や、自分の将来について自分で興味関心を持って考え、意思決定を行う「意思決定能力」に比べ、自己・他者理解や人とのつながりを円滑に行う「人間関係能力」やこれからの人生を自らプランニングする「キャリア設計能力」は、低い値であった。キャリア教育においては、特に「人間関係能力」「キャリア設計能力」に配慮した授業実践が必要であるといえよう。

表 2 有職青年における 4 つの能力領域の平均値

能力領域	平均
人間関係能力	23.30
意思決定能力	23.89
キャリア情報探索・活用能力	24.02
キャリア設計能力	22.26

3.2.2. 4 能力領域の相互の関連

表 3 は、4 つの能力領域の相関関係を示したものである。すべての能力領域において相関が認められた。このよことり、4 能力領域は、相互に関与しながら、発達していると考えられる。キャリア教育を行う際には、すべての能力に関わる内容を配列することが望ましいことが示唆された。

表3 4能力領域の相関

	人間関係	意思決定	情報探索	設計能力
人間関係	—	0.54**	0.36**	0.50**
意思決定		—	0.51**	0.53**
情報探索			—	0.63**
設計能力				—

**p<.01

※人間関係は人間関係能力、意思決定は意思決定能力、情報探索はキャリア情報探索・活用能力、設計能力はキャリア設計能力を指す。

3.2.3. 4能力領域と職業生活の充実感との関係

表4は、各能力領域と職業生活に対する充実感についてt検定を行った結果である。全ての能力領域において有意差が認められ、4能力領域の得点が高い者は、現在の生活に対する充実感を感じていた。現実の進路状況に関わらず、人生設計をしっかりと行い、決定に責任を伴っている結果と推察される。

表4 4能力領域と職業生活の充実感におけるt検定結果

	充実している		充実していない		t値	
	平均	SD	平均	SD		
人間関係	28.00	3.83	25.14	5.08	1.81	*
意思決定	27.80	5.30	21.00	3.06	3.32	**
情報探索	27.64	6.75	20.71	4.99	2.63	**
設計能力	29.13	5.64	22.29	3.77	3.12	**

*p<.05

**p<.01

※人間関係は人間関係能力、意思決定は意思決定能力、情報探索はキャリア情報探索・活用能力、設計能力はキャリア設計能力を指す。

3.2.4. 4能力領域と職業生活への行動・働きかけとの関係

表5は各能力領域と職業生活に対する行動・働きかけの差についてt検定を行った結果である。すべての能力領域において、行動を起こした者の方が、そうでない者より得点が有意に高かった。4能力領域の発達が、現実の行動につながっているといえよう。

表5 4能力領域と職業への行動・働きかけの有無におけるt検定結果

	行動・働きかけを起こした		行動・働きかけを起こさなかった		t値	
	平均	SD	平均	SD		
人間関係	27.76	3.70	23.50	6.37	3.25	**
意思決定	27.24	5.42	23.33	5.97	2.27	*
情報探索	27.96	5.65	19.58	8.23	4.39	**
設計能力	29.07	5.67	22.92	4.74	3.54	**

*p<.05

**p<.01

※人間関係は人間関係能力、意思決定は意思決定能力、情報探索はキャリア情報探索・活用能力、設計能力はキャリア設計能力を指す。

3.2.5. 4能力領域の暫定的決定経験による差異

各能力領域と小・中学校時における暫定的決定経験にみる差異についてt検定を行った結果を表6、表7に示す。

小学校では「人間関係」「意思決定」「キャリア設計能力」において、暫定的決定経験のある者の方が、ない者よりも有意に得点が高かった。

中学校段階では、全ての能力領域において、暫定的決定経験のある者の方が、ない者よりも有意に得点が高かった。

表6 小学校時暫定的決定の有無と4能力領域におけるt検定結果

	小学校暫定的決定あり		小学校暫定的決定なし		t値	
	平均	SD	平均	SD		
人間関係	27.71	3.58	26.35	6.06	1.29	*
意思決定	27.24	5.50	25.58	6.34	1.32	*
情報探索	26.69	6.36	25.95	8.06	0.48	
設計能力	29.24	5.38	26.88	7.38	1.72	*

*p<.05

※人間関係は人間関係能力、意思決定は意思決定能力、情報探索はキャリア情報探索・活用能力、設計能力はキャリア設計能力を指す。

表7 中学校時暫定的決定経験の有無と4能力領域におけるt検定結果

	中学校暫定的決定経験あり		中学校暫定的決定経験なし		t値	
	平均	SD	平均	SD		
人間関係	27.85	3.92	25.71	6.13	1.99	*
意思決定	27.26	5.84	25.15	6.06	1.63	**
情報探索	27.51	6.92	24.62	7.46	1.84	*
設計能力	29.23	5.72	26.24	7.37	2.12	**

*p<.05

**p<.01

※人間関係は人間関係能力、意思決定は意思決定能力、情報探索はキャリア情報探索・活用能力、設計能力はキャリア設計能力を指す。

3.2.6. 暫定的決定経験の積み重ね

表8は各校種段階における暫定的決定の有無の関係を示している。小学校段階での暫定的決定経験と、中学校、高校、大学段階での暫定的決定経験には、それぞれ相関が認められた。また中学校段階の暫定的決定経験と高校段階での暫定的決定経験にも相関がみられた。

小学校段階ですでに暫定的決定を行っている者は、その職種への希望を継続する如何に関わらず、中学校、高校、大学段階においても、暫定的決定を行っているといえる。また、中学校段階で暫定的決定を行っている者は高校でも、再度暫定的決定を行う傾向が認められる。

このことから小・中学校段階で暫定的決定を行っている者は、その後も暫定的決定を繰り返して行う可能性が高いと考えられる。義務教育段階での暫定的決定経験は、その後の人生に積極的に向かい、目標に向かって進もうとする力の礎を築く土台として重要といえよう。

表8 各学校段階における暫定的決定経験の相関

	小学校 暫定的 決定経験	中学校 暫定的 決定経験	高校 暫定的 決定経験	大学 暫定的 決定経験
小学校暫定的決定経験	—	0.39**	0.23*	0.21*
中学校暫定的決定経験	—	—	0.38**	-0.010
高校暫定的決定経験	—	—	—	0.13
大学暫定的決定経験	—	—	—	—

**p<.01 *p<.05

3.3 プログラムの作成・授業実践

以上の調査の結果より、学校教育においてキャリア教育を行なう際に留意すべき点が明らかになった。

まず、キャリア教育は義務教育段階で積極的に取り入れ、義務教育段階における暫定的決定を促すことである。なんとなく将来の夢を書かせるのではなく、熟考させて「暫定的に」将来の職業を「決定」させることが望ましい。

次に、4つの能力領域全てに関連するプログラムの構築が必要である。4つの能力領域を発達させることによって、連鎖的に職業や将来に対する働きかけや暫定的決定経験も増すことが期待される。これらの点を踏まえ、表9のようなキャリア教育のプログラム(全3時間)を作成した。

第1次は「自分のいいところ再発見!」というテーマで、自分の成功体験や長所を振り返り、また他者の長所を確認することで、自己評価能力や相互理解を高めるための授業を構想した。この授業では特に人間関係能力を発達させることを目的とする。

第2次は、「自分の進む方向を決めてみよう～どんな生き方があるのかな～」というテーマで、自分はどのような基準で将来の職業を選ぶのかをグループで話し合い、その後、興味を持った職業について、その仕事の役割とは何なのか、本やインターネットを用いて調べさせる。この授業は主に意思決定能力、キャリア情報探索・活用能力の発達を意図している。

そして、第3次は「自分の人生を描いてみよう」というテーマで、これから先の自分の人生を、具体的な年表にまとめさせる。この授業では、将来の目標を具体的に文字にあらわすことによってキャリア設計の意識を高め、暫定的決定を促すことを目標とする。

構想したキャリア教育プログラムに基づき、指導案・ワークシートを作成し、授業実践を行った。指導案とワークシートの一部を、表10および資料1に示す。

プログラムの前後で、4能力領域について測定する質問紙を生徒に記入させた。有職青年の調査紙同様、各領域10項目の質問を設け、その回答について「そのとおりだ」を5点、「どちらかとい

えばそうだ」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばそうではない」を2点、「そうではない」を1点として点数化し、平均点を算出した。

表11はプログラム前後における能力領域の平均点の変化を示している。プログラム実施後は、いずれの能力領域も得点が上昇していた。

また、プログラム実施後に実施したアンケート調査の結果を表12に示す。

質問1「自分のいいところや人のいいところを見つけられましたか」に対しては、143人(42%)が「はい」と回答した。また学年があがるほどに「はい」と回答する生徒が増えていた。これは、学年が上がることによって、自分自身を客観的に表現できるようになった他、周りとの人間関係もでき、自分のよいところを素直に表現しても「笑われるのではないか」という不安を抱くことが少なくなったためではないかと推測される。

質問2「自分が将来つきたい職業について真剣に考えられましたか」に対して「はい」と回答した生徒は142名で、全体の約40%であった。本授業実践が、真剣に将来の希望職種を考えるきっかけになったといえよう。また「はい」と回答した生徒が、1年生33人(32%)、2年生55人(40%)、3年生54人(47%)と、学年があがるにつれて増加しているのも特徴的である。3年生は、進路決定に向けて将来のことを考える機会も多く、一連の授業に真剣に取り組んだ結果、教育的効果も高かったと推察される。

質問3「社会に存在するさまざまな仕事や、その役割を調べることができましたか」に対しては189人(56%)が「はい」と回答した。

質問4「将来のことや将来の職業について興味がわきましたか」には、163人(48%)が「はい」と回答した。

以上のように、プログラム実施後に全ての能力領域で得点の上昇が認められ、多くの生徒が職業や将来について興味や展望を抱くという結果を得られたため、作成したプログラムには一定の教育的効果があると判断できる。

さらに特筆すべきは、第2次「自分の進む方向を決めてみよう」において、職業について調べたことを班ごとにまとめさせる発表を、学年に引き継いで発展させることができた点である。その後道徳・特別活動とも連携させ、最終的に全学年でプレゼンテーションによる発表コンテストの実施につながった。

これらの発展的展開をふまえると、本プログラムは教科(家庭科)の授業で導入可能であるだけでなく、学年単位、あるいは学校全体の取り組みとしても有効であると考えられる。

表9 暫定的決定を支援する中学校キャリア教育プログラムの作成

単元	単元目標	4能力領域	人間関係能力	意思決定能力	キャリア情報探索・活用能力	キャリア設計能力
自分のいいところ再発見！	自己肯定感を養い、自己及び他者への理解を深める。	自分の成功体験をまとめ、自分の強みを整理する。	<ul style="list-style-type: none"> 自己理解 カウンセリングマインド 自己受容 	<ul style="list-style-type: none"> 自己評価力 自己洞察力 	<ul style="list-style-type: none"> 現状認識 	<ul style="list-style-type: none"> 趣味・特技
		他者から自分の長所や個性を指摘してもらい、自分の長所を他者から指摘されることによって発見する。	<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーション能力 相互理解 相互依存 寛容性 			
		自分の強みが生かせる職業や、将来の生き方にはどのようなものがあるか考える。				<ul style="list-style-type: none"> 興味・関心
自分の進む方向を決めてみよう〜どんな生き方があるのかな？〜	希望する職業に就くためにはどのような道筋をたどればよいのか、自ら情報を収集し、検討する。	自分はどのような基準で職業を選択するのか整理する。		<ul style="list-style-type: none"> 選択能力 	<ul style="list-style-type: none"> 将来の夢 公共心 公德心 自己の役割と社会との関係把握 使命感 	<ul style="list-style-type: none"> 人生観 勤労観 進路適正の理解 価値観
		職業を選択する基準にはどのようなものがあり、「いい職業」とは何なのかをグループで話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 自己開示 自己表現能力 協力性 共感 協調性 			
		世の中にはどのような職業があり、それぞれがどのような役割を担っているのか、グループで協力し調べ、知る。	<ul style="list-style-type: none"> チームワーク ネットワーキング能力 適応力 	<ul style="list-style-type: none"> 比較検討能力 	<ul style="list-style-type: none"> 情報探索能力 情報収集能力 探究心 整理能力 	<ul style="list-style-type: none"> 社会認識
		自分が興味を持った職業について、その職業に就くためにはどのような道筋をたどればよいのか調べる。			<ul style="list-style-type: none"> 情報処理能力 情報源の探し方 コンピューターリテラシー 情報活用能力 情報評価能力 	
自分の人生を描いてみよう(職業キャリア・生活キャリア)	これから先の人生を、プランニングする。	これから先の自分の人生がどのように展開するのか考え、年表にまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> 決断力 		<ul style="list-style-type: none"> 予知能力 将来予測 表現力 図解能力 式・表・グラフ化能力 	<ul style="list-style-type: none"> 在り方・生き方 将来の生活設計 進路設計 人生設計
		希望通りに人生を送るためには何が必要なのか、グループで話し合い、発表する。	<ul style="list-style-type: none"> 問題解決能力 課題解決能力 自己指導能力 リーダー性 	<ul style="list-style-type: none"> 判断能力 論理的思考力 	<ul style="list-style-type: none"> 発表力 プレゼンテーション能力 	<ul style="list-style-type: none"> 勉学観・向上心 自己教育力 自立心・自律心 危機管理能力

表 10 指導案「自分の進む方向を決めてみよう～どんな生き方があるのかな?～」(展開部分)

時	生徒の活動	授業の流れ	教師の活動	
導入	0	本時では、職業について調べることを知る。	「世の中にはどのような職業があるのか知っていますか? 世の中には数えきれないほどのたくさんの職業がありますね。そこで今日は、世の中にある職業について考えてもらいます。」	挙手させ、意見を発表させる 机を班の形に移動させる
展開	5	班で話し合う	「皆さんは、どのような基準で職業を選びますか? お金がたくさんもらえる職業でしょうか? それとも人の役に立つ仕事でしょうか? 将来どのような仕事に就きたいと思いますか?」「どのような職業が『素敵』な職業ですか? 班で話し合みましょう」	プリントを配布する。 話し合いが進むよう、机間指導をする
	15	代表者 1 名が前に出て、班で話し合ったことを発表する	「班の代表者の人は、前に出て、話し合った結果を発表しましょう」(班の代表者は前に出て、自分たちの班で出た意見を発表する)	発表がスムーズに進むようにサポートする。
	30	世の中にある職業について、本、インターネットを中心に調べる。	「世の中にはどのような職業があり、どのような役割を持っているのか、インターネットや本を使って調べましょう。」「インターネットを使う人はパソコン室、本を調べる人は図書室に行きましょう」	調べ方がわからない生徒を支援する。
まとめ	45	まとめ	「プリントを提出しましょう」 「世の中にはたくさんの仕事があって、それぞれが大切な役割を担っています。」 「その人にとって、どの職業がよくて、どの職業が悪いのかは、一概に決めつけることはできません。世の中には様々な職業があり、それらが支えあって社会を構成しているのです。」	プリントを回収し、いくつかを紹介する
	50	終了		

資料 1 授業ワークシート

【2 時間目 「自分の進む方向を決めてみよう ～どんな生き方があるのかな?～」】

ワークシート どんな生き方があるのかな?

どんな職業が「素敵」なのかな? どうやったらその職業に就けるのか?

◆ 次のそれぞれの内容に当てはまる職業名を記入しましょう。
◆ どの内容を重視して職業を選ぶのか☆を塗りつぶして示しましょう。

内 容	内容に当てはまる職業	重 視 度
世のため人のために役立つ		☆☆☆☆
興味のあることや趣味を生かす		☆☆☆☆
給料が安定している		☆☆☆☆
他人に見られ、目立つ		☆☆☆☆
働く時間が決められている (残業や休日出勤が少ない)		☆☆☆☆
社会的な地位や名声がある (「こんな職業に就いているなんてすごいね」と言われる)		☆☆☆☆
他人を使う		☆☆☆☆
個性や能力を發揮できる		☆☆☆☆
時間や場所に变化がある (常に新しいことに挑戦できる)		☆☆☆☆
収入が多い		☆☆☆☆

◆ なぜ人は働くのでしょうか? 考えをまとめましょう。

自分の考え

班のメンバーで相談した考え

年 組 番 名 前

グループごとに5つの職業について調べましょう。

調べる職業	その職業はどんな役割を担っているのか	その職業に就くにはどうしたらよいのか
→	→	→
調べる職業	その職業はどんな役割を担っているのか	その職業に就くにはどうしたらよいのか
→	→	→
調べる職業	その職業はどんな役割を担っているのか	その職業に就くにはどうしたらよいのか
→	→	→
調べる職業	その職業はどんな役割を担っているのか	その職業に就くにはどうしたらよいのか
→	→	→
調べる職業	その職業はどんな役割を担っているのか	その職業に就くにはどうしたらよいのか
→	→	→

表 11 プログラム実施前後での能力領域の得点の変化

能力領域	実施前	実施後
人間関係能力	104.54	115.36
意思決定能力	105.15	116
キャリア情報探索・活用能力	121.56	126.2
キャリア設計能力	109.04	118.44

表 12 プログラム実施後のアンケート結果

質問項目	1年生				2年生				3年生				全体			
	はい	いいえ	わからない	無記入	はい	いいえ	わからない	無記入	はい	いいえ	わからない	無記入	はい	いいえ	わからない	無記入
1. 自分のいいところや人のいいところを見つけられましたか。	24 (24%)	9 (9%)	60 (58%)	9 (9%)	42 (32%)	21 (16%)	48 (37%)	19 (15%)	77 (68%)	13 (11%)	3 (3%)	21 (18%)	143 (42%)	43 (12%)	111 (32%)	49 (14%)
2. 自分が将来就きたい職業について、真剣に考えられましたか。	33 (32%)	18 (18%)	42 (41%)	9 (9%)	55 (40%)	23 (16%)	44 (31%)	18 (13%)	54 (47%)	4 (4%)	38 (33%)	18 (16%)	142 (39%)	45 (13%)	124 (35%)	45 (13%)
3. 社会に存在するさまざまな仕事や、その役割を調べることができましたか。	57 (56%)	6 (6%)	30 (29%)	9 (9%)	70 (54%)	17 (13%)	26 (20%)	17 (13%)	62 (59%)	24 (23%)	5 (5%)	13 (13%)	189 (56%)	47 (14%)	61 (18%)	39 (12%)
4. 将来のことや将来の職業について興味がわきましたか。	36 (35%)	12 (12%)	45 (44%)	9 (9%)	69 (53%)	19 (15%)	25 (19%)	17 (13%)	58 (55%)	32 (31%)	1 (1%)	13 (13%)	163 (48%)	63 (19%)	71 (21%)	39 (12%)

(人(％))

また、表 13 はプログラム実施後のアンケートの自由記述内容を示している。最も多かったのは、「たくさん話し合えて楽しかった」「年表を書くのが面白かった」というように授業自体が「楽しかった」というものであった。これは、この授業の進め方がグループ活動中心で、仲間と相談したり、時にはわいわいと語り合ったりするという、活気あるスタイルだったからだと思われる。

次に多かったのは、「将来のことを考えられてよかった」「今回の勉強は将来役立つと思う」等の「勉強になった」という内容であった。また、「将来就きたい職業が決まった」や「自分がこれからやりたいことが何なのか分かった」といったような、暫定的決定を行ったと思われる記述も見られた。

ただ、今の自分自身について振り返ることや、自分で自分の長所や成功体験をまとめる作業は、思春期の彼らにとって「恥ずかしいこと」であったようだ。自由記述にも、「しゃしゃり」という言葉で表現されているように、自分で自分を認め、ほめたりアピールしたりすることは、生徒によっては苦痛と感じた者もいたようである。その結果、「自分のいいところや人のいいところを見つけられましたか」という質問の回答が「わからない」に集中したと考えられる。これらの点は配慮すべき事項として重要である。

今回のプログラム実践の成果の 1 点目としては、3 回の授業実践を行うことで、キャリアに関する 4 能力領域すべてにおいて、得点が向上した

ことが挙げられる。これは、授業で取り扱った内容が、キャリアの諸能力の発達を促した結果といえよう。

2 点目としては、暫定的決定への支援が挙げられる。プログラム実施後のアンケートで「自分が将来就きたい職業について真剣に考えられた」と回答した生徒が全体の約 4 割認められ、自由記述においても「自分の将来の夢が決まった」等の回答が多数みられた。このようにこれまで漠然とした希望しか持ち得なかった生徒が、具体的な希望職種を暫定的に決定できるようになった点は評価できる。また、このような変化を示した生徒が、学年が上がるにつれて増加していた。3 年生は日頃から進路決定に向けて、将来のことを考える機会も多く、本授業実践によって、さらに積極的に将来を考えた結果、暫定的決定につながったものと思われる。

3.4.3. 効果的なキャリア教育カリキュラムの提案

以上の結果を踏まえ、現行の中学校（大阪府寝屋川市立 A 中学校）のキャリア教育実践に、今回行った授業実践を加え、より効果的なキャリア教育プログラムを検討した。（図 2）

A 中学校における現行のキャリア教育は、1 年生での「私のしごと館」への社会見学、2 年生での「職業人へのインタビュー」および「3 日間の職場体験学習」、3 年生での「進路学習」で構成される。しかし、現行のキャリア教育は、体験学

表 13 プログラム実施後のアンケートにみる自由記述内容

大項目	中項目	内容	回答数
楽しい	授業自体が「楽しい」	楽しかった。	58
		面白かった。	42
		たくさん話げできた。	33
		みんなのことがよくわかった。	29
	教材への取り組みが「楽しい」	年表を書くのが特に面白かった。	14
		みんなて話をしたのが面白かった。	13
将来について考えるのが「楽しい」	夢のことを話せたから楽しかった。	34	
	年表を書くのがわくわくした。	16	
学習としての意味	勉強になる	人の役に立つための仕事もあるんだなあとって勉強になった。	65
		自分がしたいことを見つけるのが大事とわかって勉強になった。	3
	役立つ	人生のことを真剣に考えられた。これからも自分の人生のことをがんばって考えていこうと思う。	13
		自分に役立つことや、これからの自分の将来について、考えることができた。	11
		将来のことがよく考えられた。	9
将来への希望	暫定的決定	自分の将来の夢が決まった。	7
		自分がやりたいことがわかった。	3
	夢の再確認	将来の職業はもう決まってるから大丈夫。	1
戸惑い	恥ずかしい	「私はこんなにすごい人！」はしゃしゃりみたいだなと思った。	3
		楽しかったけど、将来のことを言うのははずかしい。	1
	めんどくさい	ワークシートは書くことがたくさんあってめんどくさかった。	1
	わからない	よくわからなかった。	22
無記入		無記入	19

習が単発的に行われているだけで、継続性が認められない。また、教材として使用している「心のノート」（文部科学省 2002）では、主に職業調べに関する内容が取り上げられており、その内容は「キャリア情報探索・活用能力」に関連する部分に限定されている。

このように、A 中学校の現行のキャリア教育は、イベント的な学習にとどまっているという問題があるとともに、取り扱われる内容の偏り、体験学習との関連についても検討課題とされる。そのため、教員の多くは「学習内容が定着しにくく、キャリア能力領域の発達や進路決定の支援がむずかしい」と捉えているのが現状である。

そこで、現行のキャリア教育に今回実践した 3 回の授業を組み込み、効果的なプログラムを検討した。A 中学校で行われているキャリア教育をより効果的に行うためには、ただ闇雲に体験学習ばかりを進めるのではなく、事前事後指導に力を注ぐ必要がある。「なぜ自分は今このような学習をしているのか」が理解出来ていなければ、体験学習の意義や効果も半減しかねない。

まず事前学習を導入することにより、自分の意見をまとめさせ、目的意識を持って体験学習に臨ませたい。具体的な目標の設定のもとに体験学習を行うことで、学習意欲が飛躍的に向上すると考える。さらに事後学習を行うことで、体験学習を振り返り、理解が深まることが期待できる。

このように体験学習の前後に授業を導入することにより、自分の長所や特技、興味を踏まえた上で体験に臨めるようになり、体験学習そのものの学習効果にも貢献すると考える。

また、生徒の興味関心の変化にも対応できるよう、重層的に教育内容を配置することも必要である。具体的には、「自分の進む方向を決めてみよう」の内容を、1 年生、2 年生の 2 回にわたって学べるよう配列する。

このような、検討の結果、図 2 のようなプログラムを提案した。提示したプログラムは、A 中学校の実態をふまえたもので、教科の枠にとどまらず、学年全体の活動として行える内容である。プログラムの遂行にあたっては、道徳、特別活動、各教科の枠を超えた連携が必要であろう。

現行のキャリア教育			より効果的なキャリア教育プログラム		
学 年	時 期	内 容	時 期	内 容	
1 年			9月	自分のいいところ再発見！	自分の成功体験についてまとめる。 自分の長所、他者の長所についてまとめる
	11月	わたしのしごと館 社会見学	10月	自分の進む方向を決めてみよう	世の中にはどのような職業があり、どのような役割を持っているのか、調べる
			11月	わたしのしごと館 社会見学	「わたしのしごと館」を訪れ、グループごとに分かれて自分が希望した職業を体験する。
2 年			7月	自分の進む方向を決めてみよう	「素敵な職業とはどんな職業なのか・自分は何を基準に将来の職業を選ぶのか」意見をまとめる。 世の中にはどのような職業があり、どのような役割を持っているのか、調べる
	8月	夏休み宿題 「職業インタビュー」	8月	夏休み宿題 「職業インタビュー」	3名ないしは4名の有職の人に、その仕事に就こうと思ったきっかけや、その仕事をしていて楽しいこと、大変なことなどをインタビューし、まとめる。
	11月	職場体験学習	11月	職場体験学習	さまざまな職場に分かれ、3日間で体験学習をする。
			12月	自分の人生を描いてみよう	これから先の自分の人生を年表にまとめ、希望通りの人生を送るためにはどうしたらよいか、班で話し合う。
3 年	通 年	進路学習	通 年	進路学習	主に高校受験についての説明。

図2 A中学校におけるキャリア教育プログラムの提案

本研究の意義は、有職青年の意識および能力領域に関する調査から得られたキャリア教育への知見をもとに、実践的なプログラムを作成したことである。そして、授業実践の結果をもとに検討・提示したA中学校におけるプログラムは、教育実践に直接貢献するものである。

今後、提示したプログラムを学校カリキュラムに位置づけ、修正、発展させていくことが急務の課題である。

4. 参考文献

川端亜紀子, 河崎智恵(2008)大学生のライフストーリーにみるキャリア決定プロセス. 奈良教育大学紀要, Vo57. 1, pp. 181-190
河崎智恵(2004)家庭科におけるキャリア教育の開発に関する研究. 風間書房, 東京
国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002)児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書).

文部科学省(2004)キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために～.
文部科学省(2002)心のノート 中学校. 暁教育図書.
文部省(1999)中央教育審議会答申 初等中等教育と高等教育との接続の改善について.
柳井修(2001)キャリア発達論. ナカニシヤ出版, 京都

5. 謝辞

本研究において質問紙調査にご協力下さいました皆様方に心より感謝申し上げます。また本研究での授業実践を行うにあたり、大阪府寝屋川市立A中学校の教職員の方々、並びに、生徒のみなさんにご協力いただきました。深くお礼申し上げます。

